冬空家の長男さん

ナナシΩ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

肉体派霊能力者、冬空ミゾレ。

妹のコガラシとゆらぎ荘の一癖も二癖もある住人達と織り成す物語。

※主人公ＴＳ＆オリ主ものです。

文章力もあまりないので見苦しいかもしれません。

もしその場合はブラウザバックすることをお勧めします。

目次

♨？０：冬空家の長男さん ―――― 1
♨？１：ゆらぎ荘の住人 ―――― 11
♨？２：幽霊の少女 ―――― 30
♨？：ゆらぎ荘での１日目～前編～ 41

♨?０：冬空家の長男さん

俺は、昔からとにかく霊感が強かった。
数え切れない程の霊を見続けてきたおかげで、その手の類に関してはもう驚くことが出来ないくらいだ。
霊の種類は多種多様。はるか昔に死んだ人間は勿論、現代を生きてきた数々の職種を持った人の霊も数多くいた。
それは妖異の類も含まれており、京都に行くと必ず妖怪に喧嘩を売られちまう。
だが霊感が強すぎるためか、霊を見ることが出来るだけでは留まらなかった。
俺は霊と会話も出来るし、”ぶん殴ること”も出来てしまう。
ぶん殴ることってのは勿論物理でだ。
なにか特殊な術式を拳に施したとかじゃなく、生まれた時から霊に触れることが出来たんだ。
更に酷いことに、俺は霊を引き寄せてしまう体質らしい。
それも稀にじゃなく、頻繁にやってくるんだ。
おかげで何度も取り憑かれそうになったりしたが、幼少から鍛え上げてきた精神力と

肉体言語で解決していき、逆にその霊が生前に持っていた技術なんかを教わり、自分のものなんかにもした。

こんな面倒な体質のせいで家族や知り合いに迷惑をかけちまうかもしれないと思った俺は、国中を旅して回ろうと考えた。

それを決めた当時の俺はまだ中学生だったせいで周りは反対したが、俺は意思を曲げることはなかった。

確かに急すぎる話だったが、もし自分のせいで大事な人達が酷い目に合あったらって考えると恐ろしいし、俺自身がそんなこと許すことが出来なかった。

それにこの体質を活かして霊に困ってる人々を助けれるんじゃねぇかって考えもあった。

旅の資金も株で大成功を収めたらしいデイトレーダーの霊から教わった技術で株に手を出し、不自由にはならないくらいには稼いだのを使ったし、住処が見つからない時はサバイバルを生き甲斐としていた霊から教わったサバイバル術を使って凌いだりもした。

最終的に周りは渋々ながら納得してくれ、俺は旅を始めた。

それから数年後、俺は肉体派霊能力者として日本全土を回っていき、霊の存在に脅かされている人々を救っていった。

ネットやテレビじゃ『幽霊をぶん殴る前代未聞の男』みたいな感じで有名になったりしてるが、俺はあんま気にしなかった。

そんな俺が旅を続けていると、突然親父から電話が来た。

『言い忘れてたけどお前に妹が出来たんだが、その子もお前みたく霊感が強いんだ。どうか見てやってくれないか？』

『ついでに顔も見せに来い』と言って電話は切られたが、そんなことよりも俺は耳を疑った。

”妹”だぁ!?あの2人まだハッスル（意味深）できる元気あったのかよ！ってか妊娠してたんなら言ってくれよなんだよ忘れてたって！突然すぎるぜおい!!

等々と思わず叫んでしまったが、俺は思考を切り替え実家に帰った。

久々の我が家に帰ってきて早速俺を待っていたのは、霊に取り憑かれそうになっている我が妹の姿だった。ポルターガイストで宙に浮いているというおまけ付。

俺は即座に妹に纏わり付く霊を”一撃必殺成仏拳”（ただの正拳突き）で消し飛ばし、救出した。

妹は幼稚園にいけるくらいには成長しており、宙に浮いていた妹を抱き抱えると妹は泣きながら俺にしがみついた。

「怖かったよなぁ、もう大丈夫だからよ」と声をかけながら安心させる。その時の両親のなにか生暖かい視線に文句を言いたかったがこっちはそれどころじゃなかったんで無視することにした。

それから妹も泣き止んで新たなメンバーを迎えての家族会議。

内容は、妹も俺と同じように霊感が強すぎるため、あのような事態になってしまうことがこれから多発するかもしれない。

このまま両親が育てても妹が無事に成長するか心配で、両親の方にも被害が出るかもしれない。

そこで、一端の霊能力者である俺が妹の面倒を見てくれないかというものだった。

一応俺は今年で高校を卒業している歳だが、学校には勿論通わず旅をしながら己を磨き続ける生活を送ってきた。

そんな俺に幼い子供を育てるってのは不安もあったし、何より妹がそれに関してどう思うのかが気になった。

だが、「本当に情けない母親でごめんね・・・」と泣きそうな顔をしてそう零した母さんを見てしまい、俺は覚悟を決めた。

『俺が責任を持って、コイツを守る』

俺の言葉に両親は笑みを浮かべ、2人は妹にわかりやすく事の説明をした。

妹は意味を理解すると、両親から離れてしまうことに対して寂しさから泣いてしまう。まだ幼い妹にとって親から離れるってのは酷なものだ。

それでも両親の必死の説得によって妹は泣きながらも受け入れ、俺に「よろしくおねがいします」と舌足らずながらも頭を下げてそう言った。

俺はただ「おう」とだけ返し、妹の頭を撫でた。

こうして、俺の旅に妹というパートナーが加わった。

そして、現在・・・・・・

「ったく、驚かすだけならまだいいけどよぉ。ちったぁ相手を選べってんだ。お年寄り相手にんなことしちまったらマジで心臓に悪いだろうが、あぁん?」

『スンマセン・・・スンマセン・・・』

日もとっくに暮れた夜のとある街で、俺は妖怪相手にに説教（とういう名の脅し）をしていた。

ある老夫婦に妖怪退治を依頼された俺は今、その古典的なイタズラ妖怪の”ムジナ”に正座をさせている。

「兄貴――こっちも捕まえてきたぞー!!」

と、向こうから他のムジナ２人を両腕でヘッドロックしながらやって来たのは学ランを着た俺の妹、”冬空コガラシ”。

あれからコガラシを鍛え上げた結果、今や俺と同じ肉体派霊能力者として活躍している。

男勝りな性格であまり女物の服を好まない所は俺もどうかとは思うが、それ以外は俺の妹には勿体ないぐらいよく出来た妹だ。
「おっしゃ、そんじゃあ仕上げとすっか」
「おう!」
『『『ひぃっ!?』』』
ムジナを一箇所に纏めると、俺とコガラシは同時に腕を引き絞る。
「「一撃必殺成仏拳!!（ただの正拳突き）」」
２人で放った拳は豪速で飛び出し、ムジナ達を一瞬にして消し飛ばした。
俺らはその後静かに両手を合わせ、黙祷をする。
「・・・うっし、依頼完了だな」
「なぁ兄貴!俺今回頑張ったよな!!」
「おう、よくやったな」
キラキラした目で見上げてくる我が妹の頭を優しく撫でる。
「へへへ・・・!」
コガラシは頬を指でかきながら照れくさそうに、しかし嬉しそうに笑った。
毎回依頼をこなした最後にコガラシは必ず俺に褒められに来る。
この妹、初めて出会ったあの時の出来事が原因なのかかなり俺に依存している節があ

る。
今では立派に成長したが、まだ一緒に同じ布団で寝たいと言ってくるんだ。
流石に俺も２０歳を過ぎた大人だし、コガラシも女の子なんだからと断ろうとするが、上目遣い＆涙目（どこで覚えたのか知らないが）をしてくるから思わず頷いてしまう始末。
まぁ本人は幸せそうだし、いいかなって諦めてる俺もいたりする。

「あ、あのぉ・・・」
そんな俺らに小さく声をかけてきたのは、依頼主である老夫婦だ。
「あぁすんません、依頼は完了しましたよ」
コガラシを撫でるのを中断し、老夫婦に向き合う。
その時コガラシの「あっ・・・」と寂しげな声が聞こえたが、今は仕事を優先する。
「ありがとうございました、これでここの人達も怯えずに済みます・・・しかし、流石は有名な霊能力者さんですな。あれほど凄まじいものを見たのは初めてでした。」
「それも本当に無償でやってもらえるなんて・・・本当に、お返しをしなくてもいいんでしょうか？」
「構いません。初めに言った通り、俺らは霊の類に困っている人々を助けるボランティ

アをしているようなもんですし、一応お金には困ってませんしね。それに、今回はちゃんと報酬もありますしね。ですよね？」

「おぉそうじゃった。安い家賃で住める部屋じゃったな。しかしお金に困ってないのなら何故安い部屋を・・・？」

「いやぁまぁ安いに越したことは無いですしね。少しでも節約して貯金とかしたいんで。」

「なるほどのぉ・・・しっかりした御仁じゃ。」

俺らは老夫婦と共に移動し、その激安で泊まれるという民宿を目指す。

事前に聞いたところ、そこはかつては温泉宿として賑わっていたが、露天風呂で学生の死体が発見されたという事件が発生。それ以来、その自殺した霊が出るという噂が広まっていった。

やがてその温泉宿は廃業し、今は激安物件として物好きな人が数人住んでいるだけなんだとか。

「だから困っておってのう・・・もしその霊を成仏してくれればタダで住まわせても良いがどうじゃ？」

「んー・・・一応善処はしますけど、もし困ってるんならその物件買取りましょうか？言い値で買いますけど」

「・・・・・・アンタ、本当に軽く言ってくれるのぅ」
「ハハハッ、冗談っすよ冗談」
　そんな軽口を叩いていると、やがて不審なオーラを醸し出す大型の民宿前までやって来た。

「ここが元温泉旅館の激安下宿、ゆらぎ荘じゃ」

♨?つづく・・・?♨?

♨?1：ゆらぎ荘の住人

「にしても上下水道、エアコン完備で温泉入り放題。それでたったの月千円とはなぁ・・・」

俺らが寝泊まりする四号室に着き、そこでコガラシは自分の荷物を畳に広げながら呟いた。

「いくら霊が出るからっても、破格すぎだと思わねぇか兄貴?」

「んー?まぁそんなもんなんだろうよ。俺らは慣れてるからいいけど、他の奴らからしたら霊が出るってだけで行きたがる奴なんざ早々いねぇしな」

「ふーん、なるほどなぁ・・・うしっ荷物の整理完了!」

「ん、じゃあ先に一風呂浴びてこい。俺は後で入るからよ」

そう言って俺は畳の上に寝っ転がる。

ここまでの旅路でまぁまぁ疲労も残ってるから今は少しでも休みたい気分だった。

「えー、兄貴も一緒に入ろうぜー」

「アホか、オメェ今年で高校入学する歳だろ。いい加減兄離れってやつをしていかなきゃいけねぇんだぞ」

「あ、それは多分というか絶対無理だから」
「なに真面目な顔して言ってやがる・・・」
手を横に振って否定する我が妹に俺は呆れる。
「いいからさっさと行ってこいって・・・俺はどっちかっつうと1人で風呂に入るのが好きなんだよ」
「むぅ・・・冷てぇ兄貴だぜ・・・」
そう言いつつも諦めたのか、トボトボと部屋を出ようとするコガラシ。
「あっ、別に兄貴になら着替え覗かれてもいいから！むしろ大歓迎!!」
「バカなこと言ってねぇでさっさといけ!!」
俺は枕替わりにしていたクッションをぶん投げる。
コガラシは「ワー！」と楽しそうな声を上げながらそれを難なく避け、やっと部屋を出ていった。
「ったく・・・どこで育て方間違えたんだ・・・？」
俺は投げたクッションを拾い、もう1度寝転がる。
コガラシは今年で15～16になる。世間で言うところの女子高生に当たる年頃だ。
普段は男物の服装を好んで着るが、第三者の目から言わせてもらえば顔も可愛いしスタイルはいい方だと思う。普通に男子から告られても不思議じゃないくらいには。

だが、アイツは所謂”ブラコン”ってやつらしい。
兄貴であり、両親の代わりをしてきただけの俺だったが、何故ここまで過度な好意を寄せられているのかはよくわからない。嫌われるよりかは断然マシだが。
「・・・・・はぁ～、どうか立派に巣立っていって欲しいわ」
俺はそう呟き、妹が風呂からあがるのを待った。

「あ”ぁ”ぁ”ぁ～・・・・・最っっっ高」
湯気の上がる広い湯船、見上げれば満点の星が輝く夜空。
湯加減も丁度よく、日々の疲れが一気に抜けていく感覚に酔いしれる。
「こういう贅沢は温泉でしかできねぇからなぁ・・これを毎日出来るってのは嬉しい限

りだ」

体全体を伸ばし、完全にリラックス出来るこの環境は中々手に入らない。今回この話を受けて正解だった。

（しっかし、ここに出てくる幽霊ってのはどういう奴なんだろうな・・・）

俺はふとあの時の依頼主の言葉を思い出した。

この温泉宿が格安で止まれてしまう原因である、自殺した学生の幽霊。

確かに拳一発ぶつければ除霊出来ちまうが、全部が全部そんな悪い幽霊だけではないのが事実だ。

仲には話のわかる奴もいるし、意気投合できる幽霊も複数いる。

俺はそんな奴らに拳を振るおうとは勿論思わない。

その場合はそいつらが化けて出てくる理由である”未練”を解決して成仏させている。

（今回の霊もその未練さえ分かってしまえばそっちで片付けるのも考えとかねぇとな・・・とりあえず相手の出方を伺うか）

俺はそう結論づけ、目を閉じて天を仰ぎながらぐだーっと風呂に浸かっていると。

ちゃぷ　ちゃぷ

（・・・噂をすれば、か）

突然俺以外いない筈の風呂から、明らかに不自然な水音がすぐ近くから聞こえた。

俺は相手を確認する為に目を開け、音のする方を見ると・・・

全裸の女の幽霊が湯に指を入れて、湯加減を確かめていた。

（・・・・・そう来たかぁ）

俺は静かに目元を片手で多い、また天を仰ぐ。

こういう場合は敢えてそれに気付かぬ素振りをするのが一番だろう。

「はぁ～・・・うん！いいお湯加減です～・・・♪」

女の霊はそんな俺のことなど露知らず、呑気に俺の隣で湯に浸かっていた。

なんともまぁ害のなさそうな幽霊だと、俺はチラッと霊を見て思う。

今まで色んな霊と対峙してきたが、ここまで怨念などの負の気配を感じない奴はそういなかった。

（・・・こりゃあぶん殴る気も失せるわな。女を好き好んで殴る趣味もねぇし）

俺は女の霊に対しての考えを纏め上げ、そろそろ頃合かと立ち上がった。（ちゃんと腰にタオルは巻いている）

そんな俺に気にする素振りもせず風呂を楽しむ幽霊。

ってか幽霊って普通に風呂入れるんだな、そこに驚きだ俺は。

（・・・少し仕掛けるか）

大事な癒しの時間を邪魔されたのもあり、少しイタズラ心が芽生えた俺は去り際、女の霊に背中を向けながら一言声をかけた。

「・・・いくら見えねぇ人が大勢いるつっても、中には幽霊の姿をはっきり見える奴だっているんだぜ」

「へっ？」

俺の言葉に幽霊が反応したのを聞き取り、更に続ける。

「それに先に男がくつろいでる所へ丸裸で来るってのは・・・ちいっとばかし自意識に欠けてるんじゃねぇか？幽霊の嬢ちゃんよ」

そう言って俺は「じゃあな」と手をヒラヒラと小さく振りながら温泉を後にした。

「・・・・・・～～～～っ!!!!／／／／／」

「は～、しっかしいい湯だったわぁ・・・にしても充実してるなここは」
浴衣に着替えた俺は風呂場を後にし、温泉宿を探索していた。
手入れもしてあるのかどこを見ても清潔に保たれているし、卓球台といった温泉宿といえばこれ！といった娯楽物も置かれていた。
空の星や自然に囲まれたこの環境も相まって、窓から覗ける夜景はとてもいいものだ。
「ここに住んでる物好きな人達がいるっってたけど、ここまで良いところは早々ねぇからなぁ・・・なんともまぁ過ごしやすい場所だなここは」
「ふふっ、お気に召したようで良かったです」
１人で勝手に感心していると、突然足元から声が聞こえた。
ふと目を向けると、小学生くらいの歳の女の子がニコニコと満面の笑みをこちらに向けていた。
（いや、にしては妖異に似た気配もするな・・だが邪気なんか一切感じない所を見ると、座敷童子ってとこか？）

「おう、そこらじゃ中々見れねぇくらいにいい場所だと思ってたけど、アンタみたいな幸運の象徴みてぇなのが住んでりゃ納得だな」
「あ、やっぱり気づいちゃいました?」
「まぁな、一応妖異に対して長年通じてきたからよ。これでも一応霊能力者だしな」
「よく噂をお聞きしてました。なんでも幽霊相手に拳で除霊をする破天荒な霊能力者がいるって」
「ハハッ、破天荒か。確かにその通りかもしれねぇな」
今までそんな感じの2つ名を色々とつけられてきたしよ。
ネットで見かけた「ゴースト・バスター（物理）」とかが1番気に入ってるな。
「あっ、これから新しい住人への挨拶と親睦会を兼ねての顔合わせを予定しているんですけど。大丈夫ですか?」
「あぁ、荷物も整理して一風呂浴びたしな。時間なら空いてる」
「良かった!お部屋はこちらです!!」
座敷童子の少女は小さな手で俺の手を取り、歩き出した。
「あっ自己紹介が遅れました。わたくし、ここの中居を務めさせていただいております。中居ちとせ・・・と申します」
「俺は冬空ミゾレ、しがない霊能力者だ。あと俺には妹もいるんだが、ソイツにも良くし

てやってくれ」
「もちろんです！」

「おっ兄貴も来たか」
ちとせに案内された部屋に入ると、中は広い畳の敷かれた部屋で机が一つ置かれていた。
そこに浴衣を来たコガラシが座っている。
「おう、もう呼ばれてたんだな」
「部屋で兄貴を待ってたらちとせちゃんが来てな。なんでも顔合わせをするとかって」
俺はコガラシの横にあぐらをかいて座る。
「でもどんな人達なんだろうなぁ・・・仲良く出来るかな俺」
「いつも通りのお前で接しりゃ直ぐに打ち解けるだろうから心配すんな。俺もフォローしてやるからよ」
「兄貴のコミュ力は物凄いからなぁ、旅の中でどんだけそれに救われたか」

コミュ力って言われても、人見知りをしない性格なだけなんだけどな。
そんな感じでコガラシと駄弁っていると、部屋の襖が開いて数人入ってきた。
「ミゾレさん、コガラシさんお待たせしました!」
ちとせが相変わらず満面の笑みを浮かべながらこちらにやって来る。
それに続いてここの住人であろう3人も続く。
「皆さん、こちらがこの度ゆらぎ荘に住むことになった冬空ミゾレさん、コガラシさんご兄妹です」
ちとせの紹介に俺らは軽く会釈する。
「お～!キミ達が新しいご近所さんかぁ!お近づきにキミ達も一杯どーお?」
手に一升瓶を持ちながら顔を赤らめてこちらに近づく服の乱れた女性。
「うわぁ・・・スッゲェスタイル良いなぁ・・・」
コガラシがボソッと小さく呟いたのに、俺は心の中で同意する。
こういうのをグラマラスというのか、酒で酔った赤い顔や乱れたセーターから覗く下着で物凄い色気を放っている。しかもそんな状態でしゃがむもんだからもう色々と・・・・・・これ以上はもう言わねぇぞ。
「って、それ鬼殺しか」
が、そんなことよりも俺は彼女の持つ一升瓶に書かれた名前が気になっていた。

「んー?あーこれー??そのとーりー!私このおさけ大好きなんだー」
「へぇ、奇遇だな。俺もその酒気に入ってるんだよ」
「おー!じゃー飲もー飲もー!あ、私荒覇吐　呑子（あらはばき　のんこ）！よろしくぅ!!」
「さっきちとせが言ってくれたが、冬空ミゾレだ。よろしく頼む」
　互いに自己紹介をしながら彼女、呑子から一升瓶を受け取りそのまま飲む。
「んっんっ・・・・ぷはぁっ!くぅ～久々に体に入れる酒、それも鬼殺しってのが最高だぁ。このキツイくらいの辛さが最高に美味ぇんだよなぁ」
「わかるわかるぅ!体にド直球で来る刺激が気持ちいいのよねぇ。私も飲みたくなっちゃったわぁ!」
「んっ、ほれ」
　呑子に一升瓶を渡すと、彼女も瓶を傾けて飲み始めた。
「ぷはぁ～!おいしー♪にしてもこれでやっと飲み仲間が出来たと思うと嬉しいわ～。またゆっくり飲みましょ!!」
「おう、楽しみにしとくわ」
　と、同じ酒飲みとして気が合う知り合いが出来て俺も嬉しく思っていると。

ドスッ

「・・・・・・こっちはえらい歓迎だなぁおい」

突然飛来した苦無が俺の頬を掠め、畳に突き刺さる。

頬に鋭い痛みが走り、血も垂れているようだ。

「きっ貴様!何故呑子さんから受け取った酒をそのまま飲んだ!!そ、そんなことをすればかっ間接キッ・・・・・っ!」

苦無の持ち主に目を向けると、何やら顔を真っ赤にして狼狽えている少女がそこにいた。

((初心だなぁ))

なんか今呑子とシンクロした気がする。

「とっとにかく!もし貴様がこのゆらぎ荘の風紀を乱すような行いをした場合、この雨野狭霧が天誅を下す!覚えておけ!」

と、そんな感じで凄む彼女に俺は思わず苦笑した。

(とんだ挨拶だなぁおい・・・・にしても雨野といやぁ、この子はあのばあさんの孫か)

昔に出会った1人の元気すぎる老婆のことを思い出していると、突然コガラシが立ち上がった。
「おいアンタ、俺の兄貴によくも手ぇ出してくれたな・・・」
イカン、コガラシの奴スイッチが入っちまってるらしいな。
コイツ俺のことになると見境なく攻撃的になるからなぁ。
「ふんっ、不埒なことをするソイツが悪いんだ。貴様もその男によく言い聞かせておくんだな」
「呑子さんは全然気にしてなかっただろうが。アンタが勝手にそれ見て照れてるだけじゃねぇかよ。八つ当たりも程々にしとけよ」
「なっなんだと！私は風紀を守るためにだな!!」
「風紀風紀ってうるせぇんだよ！当人が楽しんでたらそれでいいだろうが！一々口挟んでんじゃねぇよこの初心忍者野郎が!!」
「なっ・・！貴様のような男女に言われる筋合いはない！」
「んだとこらぁ!!」
・・・・・はぁ、そろそろ止めるか。
俺は少しだけ威圧を込めて口を開く。

『そこまでにしとけよお前ら』

「っ!?」

俺の言葉を聞くやいなや、２人して同時に言い合いを止めて体を強ばらす。

「せっかくこれから仲良くしていくようにってちとせがセッティングしてくれたのによ、そんな無駄な争いしちまったらちとせに申し訳ねぇと思わねぇか?俺のことなんざどうでもいいんだよ。だけどもっと視界広げて行動しろよお前ら」

「うぐっ・・・」

俺の言葉に２人は罰の悪そうに顔をしかめた。

「はぁ・・・コガラシちょっと来い」

コガラシがとぼとぼと歩いて俺の前で正座すると、俺は加減をしたチョップを頭に向けて振るった。

「あだっ」

コガラシは変な声をあげて叩かれた頭をさする。

「お前のやったことは兄ちゃんとしては嬉しいけどよ、それでもこれから世話になる人にそんな口の効き方はねぇだろ?こりゃただの切り傷だ。俺は別に気にしちゃいねぇよ。だから・・・何すべきかは言わなくてもわかるよな?」

「・・・・・・うん」
「うしっ、なら行ってこい」
俺が頭を撫でながらそう言うとコガラシは立ち上がって狭霧に顔を向け、頭を下げた。
「その、ごめん。俺、兄貴に何かあっちまうとついカッとしちまうんだ。だから、えと・・・キツく行っちまった。本当にごめん」
「うっ・・・」
コガラシの謝罪に狭霧は居心地悪そうにたじろ。
「ほらぁ狭霧ちゃん？コガラシちゃんが誤ってくれたんだしさ、ね？」
「そうですよ狭霧さん。仲直り、ちゃんとしてください」
「・・・・わかっている」
呑子やちとせにもそう言われ、狭霧は観念したようだ。
「・・・私もその、悪かった。確かに私はその、いっ異性に慣れてなくてな・・・手が出てしまった。すまない」
狭霧もコガラシと同じように頭を下げた。
これで一件落着だな。
「しっかしいきなり苦無を投げられるとはなぁ、一切思ってなかったから避けれなかっ

たわ」
「うっ・・・本当にすまない」
「さっきも言ったけど気にしちゃいねぇよ。いい腕だなって逆に感心しちまったくらいだ」
「・・・とっ当然だ!これでも私は誅魔忍の1人だからな!!」
「ほ～、誅魔忍か。何度かそいつらと仕事したことあったけど、なるほどなぁ。ならその腕前も納得だわ」
「む?きさ・・・う”んっ!あ、貴方も霊能力者か何かなのか?」
「一々直さなくても構わねぇよ。呼びやすい方で呼んでくれ。まぁそんな感じだ」
「ほぅ・・・ん?冬空、ミゾレ・・・・・・・・・・あっ!!まっまさか貴方はあの『拳人ミゾレ』なのですか!?」
「あったなぁそんな二つ名・・・まだアイツらそれで呼んでんのか俺のこと」
「我ら誅魔忍からすれば貴方は伝説中の伝説ですよ!幾千もの妖異や誅魔忍が束になっても敵わないような上位種をその拳一撃で討伐してきたという。それで貴方に助けられた誅魔忍も数多く・・・・・・っっっ!!?わっわたしはそんな大恩人になんてことをっ!!」
「こんな小せぇ傷で気にしすぎだぜおい。それにそれは昔の話だ。今の俺はただの霊能

力者だ。普通に接してくれよ」
「うぅ・・・本当に申し訳ない・・・・・・改めて、よろしく頼む」
「おう、よろしくな。狭霧」
さて、んじゃあと1人残ってたが・・・。

ペロッ

「なっ!?」
苦無で切れ、血を流していた頬を生暖かい何かが拭った。どうやらその1人に舐められたらしい。
それを見たコガラシが驚く。
「んっ、なにしてんだ?」
「・・・夜々が治してあげる」
猫耳のついたフードを被った少女、夜々がそう言うとまた舐め始めた。正直くすぐったいがその好意は嬉しいので頭を撫でてやる。
「ありがとよ」
「・・・・・♪」

撫でてやると夜々は気持ちよさそうに目を細め、自分の頬を俺の頬に擦り付ける。所謂頬ずりってやつだ。

「おー、夜々ちゃんが懐くなんて珍しいね～」

「やっ夜々!?ちっ近すぎるぞそれは!!」

まるで猫のような行動に俺は思わず笑顔になる。可愛いやつだなおい。

「いい加減兄貴から離れろ!」

「わー」

突然コガラシが夜々を力づくで離れさせる。

夜々は真顔で畳に転がる。楽しそうだなおい。

「あっ兄貴もなにされるがままになってんだよ!」

「いや、猫みたいで可愛いからつい」

「ぐぅ・・・!兄貴に可愛いって言われるなんて・・・うらやましい!!」

おい泣くほどかそれは。

「あはははは・・・でもこれから仲良くなれそうで良かったです。中居としても嬉しく思います」

ちとせのその言葉でお開きになるんだろうが、俺はふと気になったことを思い出した。

「そういやちとせ、まだあと”1人”残ってるんじゃねぇのか？」

そう言って俺は一つの襖に指を指す。

「例えばあそこで聞き耳立ててる幽霊の彼女とかよ」

♨？つづく・・・

♨?2：幽霊の少女

「すっすみません!盗み聞くような真似をしてしまって・・・」
挨拶を終えた俺達の前にいるのは、慌てながらこちらに頭を下げている幽霊の少女。
そう、先程俺が温泉に浸かっていた時にやって来た嬢ちゃんだ。
「別に気にするこたねぇよ。盗み聞くつってるけど最初からわかってたことだしな」
「うぇっ!?あ、あれ。気配を消していた筈なんですが・・・」
「俺は霊の気配には敏感でな、そう簡単に俺を誤魔化すことはできねぇよ」
俺がそう言うと嬢ちゃんは「あぅあぅ・・・」と口から変な声を零しながら赤面する。
「幽奈ちゃん照れちゃって可愛い～」
呑子はそんな幽奈を見てからかいながら酒を飲む。
「って、そういやアンタはここの住人ってことでいいのか?」
俺の隣にいるコガラシが幽霊の嬢ちゃんにそう聞いた。
「あっはい!わたしはこのゆらぎ荘の地縛霊、湯ノ花　幽奈（ゆのはな　ゆうな）と申します!仲居さんに新しい住人との交流会があると聞いたので来させて頂きました!!」
会釈をしながら自己紹介をした幽霊の嬢ちゃん。

それに並って俺とコガラシも頭を軽く下げる。
「さっきも風呂で会ったかけど改めて、俺は冬空ミゾレ。こっちは妹のコガラシだ」
「はじめまして！これからよろしくな!!」
「はい！こちらこそよろしくお願いします!!」
互いに紹介し合うと、狭霧が突然声を上げた。
「まっ待て！い、今ミゾレさんは風呂で会ったと言ったのか!?」
「「・・・・・・・・・・・・あっ」」
狭霧の指摘に俺と幽奈は目を合わせる。
「・・・・・・・っ～～～～～!!／／／／／」
すると幽奈の顔は幽霊の筈なのにまるで茹でダコのように顔が真っ赤になった。

「あ～・・・いやまぁ、あれに関しては事故っつうかその」
久々にこの現状に困った俺は首に手を回しながらなんとか誤魔化そうとする。
「ミゾレさん（兄貴）!!」
「うぉっ」
そんな俺に突然コガラシと狭霧がぐいっと身を乗り出して近づいてきた。２人とも若干赤面しながら。

「どういうことか説明しろよ兄貴！風呂で会ったって・・・っ!!つまりそういうことなのか!?」
「ミゾレさん！いっいくら貴方でも風呂で混浴などいけません!!」
　こいつら相手が幽霊ってわかってて言ってるのか（汗）。
「あらら～、なら私も今度ミゾレちゃんに背中流してもらおっかな～？」
「「なっ!?」」
　それに悪ノリする鬼女1名。
「私もミゾレとお風呂入る・・・」
「「ちょっ！」」
　更に猫少女1名（こちらは割と純粋）。
「ダメですよ皆さん、そういうのはちゃんとミゾレさんに許可を貰ってからでないと」
「「ちとせさん（ちゃん）まで!!?」」
　そして以外にもノッてきた座敷童子。
　ここの住人、ノリノリである。
「「う～・・・！ミゾレさん（兄貴）!!」」
「あっはい」
「「こっ今度は私（俺）も一緒に!!」」

「あほかてお前ら」

もはや頭が沸騰して思考がヤバめになってきたこいつらにチョップをかます。顔面真っ赤っかだし目グルグルしてるし。

「「あうっ」」

くらった両名はそのまま畳の上に倒れ込んだ。こいつら割と仲いいな、息ぴったりだし。

やっと落ち着いたところで幽奈の方に目を向けると・・・。

「・・・・・・・・・・・・／／／／／」プシュー

２人のように畳に倒れて盛大に湯気を出している嬢ちゃん（幽霊）がそこにいた。

どないせいっちゅうねんこの状況。

「ったく、お前らが変に騒ぐからグダって終わったじゃねぇか」

「「ごめんなさい・・・」」
　今日から俺達の自室となる四号室で三人分の敷布団を敷きながら愚痴る俺にコガラシと幽奈が正座しながら謝る。
「はぁ・・・もう気にしねぇから2人も早く寝ろ。幽奈も布団使うんだろ?」
「あっはい!使います!」
「幽霊なのに布団で寝るのか・・・?」
「ふふふ・・・わたしこう見えて実体のある物を触ることが出来るんです!幽霊歴も長いんで触りたい物にはちゃんと触れるよう特訓したんですよ!それに布団で寝る方が気持ちいいですし」
「へ〜」
　胸を張って自慢する幽奈を見て感嘆の声を上げるコガラシ。
「ほら、俺は右端で寝るからお前ら並んで寝ろ」
　俺は2人にそう言って布団に入ろうとする。
「えー兄貴真ん中で寝てよー」
　するとコガラシが口を尖らせてそう言った。
「は?なんで真ん中なんだよ」
「だって俺左で寝るって決めちゃったし、そしたら兄貴の隣で寝れないじゃん」

「お前なぁ・・・もう高校生なんだから子供みてぇなこと言ってねぇで・・・」
「お願い、兄貴・・・」クゥ～ン
断ろうとするとコガラシは渾身の子犬顔（上目遣い＆涙目）を向けてきた。
「・・・・・・・・・・・・・・・ハァ、幽奈はそれでもいいか？」
「あっはい！わたしは全然それでも大丈夫です!!」
「・・・だとよ」
「うしっ!!」
嬉しそうにガッツポーズするコガラシ。
妹に弱いのは相変わらずか・・・と内心愚痴る。
「じゃあ電気消すぞ～」
「「はーい」」
二人同時に返事されると妹が２人になったみてぇだ。仲良くなれて結構だが少し複雑。
俺は電灯の紐を引っ張り、電気を消した。

「くか～・・・・・・・」
「・・・幸せそうに寝やがってよ」
少女の癖にいびきをかいて寝ている我が妹に苦笑する。
今はもう0時を過ぎた深夜。外からは虫の鳴き声しか聞こえない。
「あ、あの・・・」
すると隣で寝ていた幽奈が小さく声をかけてきた。
「ん、どうした?」
「えと・・・お風呂の件でまだ誤ってなかったと思ったので。本当に、申し訳ありませんでした」
「それに関しては俺も悪かった。あのまま黙って出てりゃ気にせずに済んだのに声かけちまってよ」
「いっいえそんなっ。あれはわたしがどうせ見えないだろうと勝手な判断で招いてしまったことなので・・・それに、ミゾレさんの入浴の妨げになってしまったのではないかと・・・」
「いいっていいって、本当に気にしなくていいから。それにこれからこの部屋で一緒に

暮らしてくんだぞ?なのにそんな他人行儀でやっていくのか?」
「あっ・・・ごめんなさい」
「今日あったことは忘れちまおうぜ。その方が楽だろ?」
「・・・ふふっ、そうですね」
「まぁ幽奈の入浴シーン拝んじまったから忘れれるかはわかんねぇけどな」
「なっ!?わっわたしだってミゾレさんのその・・・すっ素敵な裸体を拝ませて頂いたのでそう簡単に忘れられません!」
「ぷっ!ハハハハ・・・なんだそれ」
幽奈と会話をしていくうちに最初に感じていた距離感は無くなったようだ。(会話の内容は置いといて)
「・・・そろそろ寝るか」
「はい、おやすみです・・・」
「あぁ、おやすみ」
俺はそのまま目を閉じ、眠りについた。

翌朝。

むにゅ

（・・・なんだ?）

全身を柔らかい何かが当たっている感触が走る。

体もやけに重く感じ、俺は目を開けた。

「「す～・・・す～・・・」」

「・・・ったく、お前ら似たもの同士かよ」

両側で寝ていた筈のコガラシと幽奈が二人して俺の体に抱きついていた。

俺は顔に手をやってどうしようかと考える。

「ミゾレさ～ん、コガラシさ～ん、幽奈さ～ん。朝ですよー」

そんな時に四号室の入口からちとせが入ってきた。ナイスタイミングだ。

「わりぃちとせ、すまねぇけどこいつら起こしてくんねぇか?」

「え?・・・あらあら、仲良しなんですねぇ」

ちとせは俺の現状を見て穏やかに笑う。
見た目は小学生だがその表情は母親を思わせる。
「コガラシさん、幽奈さん。朝ですよ～」
２人の体を揺すって起こそうとするちとせ。
「う～ん・・・もう朝かぁ・・・」
「ふぁ～・・・おはようございます仲居さん・・・」
目を擦りながら起きるコガラシに、あくびしながら目を覚ます幽奈。
「・・・・・・・え？」
そして二人同時に今の状況が読めたのか、俺に目を向けた。
「ようお二人さん、俺を抱き枕にしてたけど良い夢見れたか？」

その後二人共恥ずかしさやらなんやらで騒ぎ出し、苦笑する俺とちとせだった。
ってかコガラシお前昔から抱きつく癖あっただろうに。忘れてたのか。

♨つづく〜

♨？：ゆらぎ荘での1日目～前編～

ゆらぎ荘にやって来て1日目がスタートした。
俺を抱き枕にしてたコガラシと幽奈はなんとか落ち着き（顔はまだ赤いが）、2人とも布団を片付けて朝風呂に向かった。
朝からあんな温泉に浸かれるなんてなんともまぁ贅沢な話だ。
そんな2人を他所に、俺は1人ゆらぎ荘を出て裏山に出かけていた。
ちとせ曰く、裏山の山道を辿って行くと奥には小さな滝があり、身を清める為の滝行に使われているらしい。
「滝行は生まれてからやったことねぇし、いっちょやってみるか」
と軽い気持ちで山道を進んでいると、やがてザーと小さく滝の流れる音が聞こえてきた。そろそろ着きそうだ。

それから少し歩くと、目的の場所にやってきた。
だがそこには先客がいた。

「・・・・・・・・・・・・・・」
白装束を纏い、滝に打たれながらも真っ直ぐ姿勢を保ちながら立ち、両手を合わせて目を閉じている狭霧がそこにいた。
（真面目な狭霧のことだし毎朝やってんだろうな。関心関心）
俺は彼女が終わるまで待つことにし、近くにあった岩場に腰を下ろした。

「ふぅ・・・・・・え?ミゾレさん!?」
数分が経つと狭霧が滝壺から出て、俺に気づき驚く。
「よう、毎朝ここで滝行してるのか?」
「えっえぇまぁ・・・その、全く気配が感じられなかったんですが」
「あぁ、邪魔しちまうのも悪いと思ってな。気配消してたわ」
「そう、ですか・・・（自惚れているわけではないが、まさか私が気づけないとは・・・拳人は伊達ではないということか）」
狭霧は複雑な顔をしてなにやら考え込んでいる。
「ほらよ、これ使いな」
「わぷっ」

そんな狭霧に俺は持ってきていたタオルの予備を投げ渡す。
タオルはそのまま狭霧の顔に当たり、狭霧は変な声を出した。
「早く拭きな。考えるのはいいがそんな格好でいたら風邪引いちまうぞ」
「あ、ありがとうございます・・・」
狭霧にタオルを渡した俺は持ってきていたバッグから白装束を取り出し、上のシャツを脱ぐ。
「っ!?なっ何をしてるんですか!!」
「何って、白装束に着替えてるんだが・・・」
「だとしても突然服を脱ぎ始めないでください!!／／／／」
狭霧は顔を真っ赤にしタオルで顔を隠す。が、目はしっかりと俺の体を見ている。
（そういや狭霧は男にあんま免疫がなかったか・・・にしては俺の体メッチャ体見てるけど）
（すっ凄い体つきだ・・・どうやったらこんな綺麗な肉体を作れるんだ・・・・・って何をマジマジと見ているんだ私は!!）
白装束を上に羽織り、下も着替える。（流石にこれはちゃんと物陰に隠れて行った）
そしていよいよ滝行をしようと滝壺に足を突っ込み・・・。

「冷たっ！やっぱやめよ」
「えぇっ!!?」

「まったく・・・まさかあんなすぐに諦めるなんて」
「ハハハッ、兄貴らしいな」
「ミゾレちゃんったら案外子供っぽいとこあるのね～」
「ミゾレさん可愛いです♪」
「モグモグ」
滝行を速攻で終わらせた俺は狭霧と一緒にゆらぎ荘に戻り、今は皆で朝食をとっている。
机を囲む面々（猫娘除く）は飯を食いながら俺のことを弄ってくる。
「うるせぇなぁ。俺だってあそこで諦めるとか思ってなかったっての」
俺は文句を言いつつ味噌汁を啜る。美味いなこれ。
「まぁまぁ皆さんもそこまでにしてあげてください。あ、ミゾレさんご飯のおかわりは

いりますか？」
　そこにちとせが白米の入ったおひつを持ってやってきた。
「おう頼む、しっかしちとせの作った飯どれも美味いなぁ」
「ふふっ、ありがとうございます。お世辞でも嬉しいです」
「いやいやホントに美味いよちとせちゃんの作ったご飯！何杯でもいけちゃう!!」
　俺の言葉に同意するようにコガラシも笑顔で言いながら飯をかきこむ。
「お前なぁ・・・少しは女らしく上品に食えよな。見てみろ狭霧を、あそこまで手本になりそうな綺麗な飯の食い方はそうそうお目にかかれねぇぞ？」
「え!?そ、そうか・・・？」
　狭霧は突然の俺の褒め言葉に戸惑いつつも微笑む。
「えー、美味い物は自由に食いたい主義なんだよなぁ」
「ったくお前ずっとそれ言ってるよな・・・ほら米粒ついてるし」
　コガラシの頬についた米粒を取って食べる。
「えへへ、ありがと兄貴」
　それに嬉しそうな顔をするコガラシ。たかが米粒取っただけで変なやつ。
「おー・・・ミゾレちゃんったら物凄く自然にしてあげたわね」ヒソヒソ
「わっ私があんなことされたら・・・っ」コショコショ

「やはり兄妹だからと言うべきか、とても手慣れてますね」ボソボソ
そんな俺らを見て夜々以外の三人がなにやら小声で喋っている。
「どうしたんだお前ら?」
「「いえなにも!!」」
俺が聞くと三人揃って誤魔化された。
「ふーん・・・ん、夜々もついてんじゃねぇか」
「う?」
左隣に座っていた夜々の頬にも米粒がついているのに気づき、コガラシ同様に取って食う。
「ありがと」
「おう」
夜々にそう返し、二人して食事に戻る。
「「「(なんでそんな自然なの２人とも)」」」
夜々はなんかわからんが猫っぽいところも相まって甘やかしてしまう俺であった。